

聖書：マタイ 25：1～13

説教題：目を覚ましていなさい

日時：2020年6月21日（朝拝）

イエス様が終末に関するメッセージを語られたマタイの福音書 24～25 章のオリーブ山講話。前回までで 24 章を読み終え、今日から 25 章に入ります。この章には 3 つのたとえ話が連続して記されています。今日見るのは「花婿を迎えに出る 10 人の娘のたとえ」、来週は「タラントのたとえ」、その次の週は「羊とやぎのたとえ」です。さて今日の箇所を読んで皆さんはどう思われたでしょうか。先週見た内容と同じではないかと思われた方も多いかもかもしれません。24 章 36 節から、この世の終わりの日すなわちイエス・キリストの再臨の日について語られ始めました。そして前回の 24 章 42 節で、いつ主が来られるか分からないから「目を覚ましていなさい」と言われました。今日の 25 章 13 節にも、「目を覚ましていなさい」と出て来ます。とすると、今日の話は先週の話と本質的に同じなのでしょうか。とすると今日はあまり真剣に聞く必要はないということになるのでしょうか。確かに基本メッセージは同じです。しかしイエス様が「目を覚ましていなさい」というメッセージを、またお語りになったということは、それだけこのメッセージがイエス様にとって重要であることを意味します。ですから私たちは「何だ、前と同じではないか」と言わないで、それだけこれは重大な話なのだ、繰り返して聞く必要があるメッセージなのだと思えます。そしてそれほどイエス様が強調していることをしっかり自分の心に刻み、この真理に生きる者であるように導かれたいと思えます。

さて 1 節はこう始まります。「そこで、天の御国は、それぞれともしびを持って花婿を迎えに出る、十人の娘にたとえることができます。」 こうして語り出されるこのたとえは、当時のユダヤにおける結婚式の習慣を背景にしたものです。結婚式は特別の時です。沢山の食べ物、飲み物が出され、何日間も祝いの時が続きます。ですからそれらの準備がすべてできてから祝宴はスタートします。そのためにゲストはしばらく待つことが必要でした。今日のように予定時間ピッタリには物事は進行しません。まず花婿が花嫁の家に向かいます。そして花嫁を連れて自分の家へ戻って来ます。その行進はたいい夜に行われました。そしてその行進には花嫁の友達、ブライドメイドが付き添いました。ここに出て来る 10 人の娘は、その人たちであると考えられます。彼女らはともしびをともして行く道を照らす役割を果たします。そして無事、花婿の家に着いたら盛

大な祝宴がスタートします。

さてこのたとえにまず示されていることは何でしょうか。それは天の御国は結婚披露宴の喜びにたとえられるものであるということです。イエス様は9章15節で、なぜあなたの弟子たちは断食しないのですかと問われた時、ご自分を花婿にたとえて、こう答えられました。「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか。」 イエス様はこうして、結婚披露宴にもたとえられる祝福が地上に臨み始めたことを語られました。イエス様とともにやって来た天の御国は、結婚披露宴の喜びにたとえられるということでした。しかしそれはやがての日に比べればあくまで前味のようなものであり、その究極的な成就是、イエス様の再臨後に完成する最終的な天の御国において起こります。

では天の御国における喜びとはどういう喜びなのでしょう。そのことはここには詳しく書かれていませんが、聖書の色々な箇所から分かります。それはまず罪が完全に赦される喜びと言えます。また罪の問題が完全に解決されてイエス様と、神様と、深く結ばれて全き交わりに歩む喜びと言えます。神ご自身をこれまで経験したことがないほどに近く味わい、神ご自身を私の最高の喜びとし、またその神がくださる完全な祝福に生きます。そこにはもはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもありません。私たちの目の涙は全くぬぐい取られ、永遠のいのちを豊かに味わう世界がスタートします。私たちの行く先にはこのような世界が用意されています。主の再臨を経て入るように招かれているのは、このような祝宴にたとえられる世界です。そのことを私たちはこのたとえを通して改めて思わされます。

次にこのたとえから学ぶことは何でしょうか。それは主の再臨はいつ起こるのか、私たちには分からないということです。先に述べましたように、当時の結婚式は準備がすべて整った後、花婿が花嫁の家に向かって出発します。今日のように電話やメールやラインで知らせることができませんから、いつ花婿が来るか分かりません。そのため、思わぬ時に来るということが起こりかねないわけです。このことはこれまでも言われていました。前回24章37節で「その日はノアの日と同じように実現する」と言われましたが、ノアの時代の人々は、さばきの日なんか来ないと思っていました。そして準備を全くしていなかった人々の上に突然さばきの日は臨みました。また24章45～51節ではしもべのたとえが語られ、そこに出て来た悪いしもべは「主人の帰りは遅くなる」と考え

ていました。ところが予想したよりも早く帰って来て大変なことになってしまいました。今日のたとえはこれの逆です。5 節に「花婿が来るのが遅くなった」とあります。つまり思ったより遅い！ということです。今日の私たちはどうでしょうか。イエス様の時代から 2000 年も経ったから、遅い！と思うでしょうか。そしてある人は今日のたとえに、主の再臨は思ったよりも遅れるという暗示があると見ます。しかし今見た前のたとえでは、予想したよりも早く来たことが言われていました。ですから私たちは聖書は再臨が遅れる可能性だけを示唆していると読むではならないと思います。私たちが今予想しているより早く来るかもしれないのです。しかし今日のたとえでは逆に遅い場合のことに焦点が当てられています。それでも大丈夫か？ということが問われています。

この花婿が来るのが遅くなったことが、10 人の娘たちを 2 つのグループに分けることになりました。この時までには 10 人はみな同じように見えました。花婿からこの務めを与えられた同じ仲間、同じ友達のように思われました。しかし花婿の到着が遅れたことによって、彼女たちは 2 つのグループに分けられることが明らかになったのです。すなわち「愚かな娘たち」と「賢い娘たち」です。愚かな娘たちについて 3 節に「愚かな娘たちは、ともしびは持っていたが、油を持って来ていなかった」と記されています。彼女たちは油に浸した布を巻き付けたたいまつは手にしていました。これさえあればこの働きはできると考えていました。自分たちが予想する時間内に花婿が来るなら、ということです。もう一方の賢い娘たちは 4 節にあるように、「自分のともしびと一緒に、入れ物に油を入れて持って」いました。たいまつ他に、花婿の到着が遅くなった時のために別に油を容器に入れて持って来ました。この準備の違いが花婿が来た時に明らかになります。彼女たちは 10 人とも眠っていましたが、「さあ、花婿だ。迎えに出なさい」との声を聞いて、急いで準備を開始します。その時に愚かな娘たちは、自分たちが大変な状況にあることを悟ります。8 節に「私たちのともしびが消えそう」とあります。これは現在時制で記されていますから、今まさにどんどん消えかかっている状態にあることを意味しています。そこでどうかあなたがたの油を分けてください！と他の 5 人に頼みます。これに対して賢い娘たちは言います。「いいえ、分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って自分の分を買ってください。」ある人はここを読んで何と無慈悲な人たちか。入れ物に入っている油を少しくらい分けてやっても良いだろうに！と思うかもしれませんが。しかしそうではないのです。花婿の家はすぐ近くとは限りません。隣の村、さらにその隣の村かもしれません。また多くの家に知らせながら行進するために、一直線ではなく、あちこちを回りながら歩いたと言われます。そんな途中

で油が切れたらすべてが台無しになります。夜道を歩くことができなくなり、行進は中止となり、花婿と花嫁また両家に大恥をかかせてしまいます。ですからここに油があるからと言って分けてあげることはできない。店に行って、自分の分をお買いなさいと言ったのです。古代世界では結婚式は町中、村中の出来事でしたから、真夜中でもどうしても必要なら店を開けてくれることは十分あり得たと言う人もいます。しかしそれ以上にここに大事な原則があります。それは主の再臨のための準備において、誰も他の人に頼ることはできないということです。自分のすべきことをしないで他の人に代りをやってもらうことはできないのです。準備は一人一人がしなければならないのです。自分の準備は自分がしなければならないのです。

さてこう言われて愚かな娘たちは急いで油を買いに行きます。その結果はどうだったでしょう。10節を見ると、その間に花婿は到着しました。そして用意ができていた娘たちは出発し、花婿と一緒に婚礼の祝宴に入りました。そして戸が閉じられました。その後で残りの者たちが来ます。油を買うことができたのか、それともそれはできなかったが祝宴場に入れてもらいたくて来たのか分かりませんが、「開けてください」と頼みます。「ご主人様、ご主人様」と繰り返して熱心にアピールします。しかしどんなに強い叫びも役に立ちませんでした。中から厳しい主人の言葉が返って来ます。「まことに、あなたがたに言います。私はあなたがたを知りません。」随分冷たい言葉ではないかとある人は思うかもしれません。また「知らない」はずはないのではないか、知っているからこの働きを頼んだのではなかったかと考えるかもしれません。しかしこの「知らない」とは、あなたと私には関係がないという意味です。主人を責める前にまず自分を省みなくてはなりません。彼女たちは準備を怠りました。そして大切な務めを果たしませんでした。これは主人を辱めることであり、主人を大切に考えていなかったことの現れです。つまり彼女たちは、花婿のことを本当に考える真の友ではなかったのです。だから知らないと言われたのです。ここに主の再臨が起きてからでは取り返しが見つからないということが示されています。戸が閉められてからでは、いくら泣き叫んでももう開けてもらえない。主の再臨後に人が救われる可能性はないのです。その扉が開かれている間に入らなければならないのです。

こうして最後の13節にまとめとして、こう語られています。「ですから、目を覚ましていなさい。その日、その時をあなたがたは知らないのですから。」ある人はこの結論の言葉はたとえの中身とうまく合致しない。なぜなら賢い娘たちもたとえの中で眠っ

ていたからと言います。しかしこれは字義的で眠ってはならないということではないのです。先週も述べましたように、これは靈的な意味で取るべきです。賢い娘たちは必要な備えをすることによって靈的に目を覚ましていました。そのようであるように！とされているのです。

さて私たちは自分を振り返ってどうでしょうか。再臨の主をお迎えする準備はできているでしょうか。多くの人がこのたとえを読んで思うのは、果たして私がすべき準備は何なのかということではないでしょうか。賢い娘たちと愚かな娘たちの違いは、賢い娘たちが「油」を別に用意していたことでした。そこで私たちが気になるのは、この油は何を指しているのかということです。ある人はこれは「信仰」のことだと言います。信仰の火を絶やさないようにという勧めがここにあると。またある人はこれは「聖霊」を指すと言います。聖霊の油がいつも自分を満たしているように、聖霊の火が燃えているようにと。またある人は「あなたがたの良い行いを人々の前で輝かせよ」という御言葉がある通り、これは「良い行い」を指すと見ます。しかしほとんどの注解者は、この油は何か特別に象徴的な意味を持つものとしては語られていない、少なくともそのためのヒントはここには何も与えられていないと言います。従っていわゆる寓話的解釈を避けるべきである。特別な意味をここに見出して、そこからいわゆる靈的なメッセージを引き出すようなことをすべきではない。むしろたとえのメインポイントをしっかりとつかむようにすべきであると警告しています。このたとえが強調していることは、主の日に備えて準備していることの大切さである。何を準備するかという細かいことまではここでは言っていない。イエス様は今日の人々が求めるような「再臨に備える5つのステップ」とか、ハウツー形式の単純なメッセージを語ってはいない。準備すべきことの重要性を強調しているだけであって、何を準備するかは、他で教えられているイエス様の多くの教えに照らして考えられるべきであると。確かにそうであるだろうと思います。

主の再臨に備える生き方として、ある人はこう言いました。あなたがたはあたかも次のようであるかのように生きなさい。すなわちキリストが昨日死んだかのように。また今朝キリストが死からよみがえったかのように。そして明日キリストが再び来られるかのように。なかなか味わい深い言葉と思います。昨日キリストが十字架にかかれたかのように、そのようにキリストが大きな代価を私のために払ってくださったことを新鮮に覚える。しかしそれだけでなく、キリストは今朝よみがえったかのように、すなわち死を打ち破った方のいのちと力に自らが今生かされていることを感謝をもって覚える。

そして明日キリストが来るかのように。「今日キリストが来ても良いように」という考えも良いですが、今日だとすると、後できることはほとんどありません。しかし明日来るかのように！と真剣に考えると、今日できることを色々考えることができます。もしキリストが明日再臨されるならあなたは今日をどのように過ごしますかという問いは、昔からよく言われて来ました。慌てて突然何かに取り組むようでは普段の生活が正しくないことを意味します。理想的な答えは、明日キリストが再臨されるとしても私は今までと同じように生活するということです。普段からそのように歩むことの大切さを強調する上ではそうでしょう。しかしなかなか理想通りではない私たちは改めて自らに問うてみると良いのではないのでしょうか。もし明日キリストが再臨されるなら、私は今日どうするか。おそらく私たちは聖書を開いてもう一度様々な御言葉にじっくり聞くのではないのでしょうか。また祈って過ごすのではないのでしょうか。まだ告白していない罪を告白し、御前にふさわしくないものを捨て、福音を信じる歩みへ向かうのではないのでしょうか。そしてイエス様に喜ばれる歩み、またイエス様にならう歩みへ、神を愛し隣人を愛する歩みへ、また（24章14節の御心に従って）周りの愛する方々に福音を伝えることへ進むのではないのでしょうか。まさにこういったことが目を覚ましていることの内容ではないのでしょうか。もしこのように生きるなら、いつキリストが来ても私たちは慌てることはありません。夜になって目を閉じて眠っていたとしても、その時が来れば、霊的に目を覚ましている者として、喜んで立ち上がって行くことができるでしょう。

果たして私たちは「準備」しているのでしょうか。先ほどの人は言いました。あたかも昨日キリストが死んだかのように生きなさい。また今朝キリストが死から復活したかのように生きなさい。そして明日キリストが再び来られるかのように生きなさい。花婿なる主は、素晴らしい祝宴に私たちを招き入れるために来てくださいます。いつその時が来ても良いように、あたかも明日来られるかのように、私たちは今日の自分の生活を整えたいと思います。そして「さあ、花婿だ！」との号令がかかったら直ちに喜んで迎える賢い娘たちのように、目を覚ましている者の歩みへ導かれてまいりたいと思います。